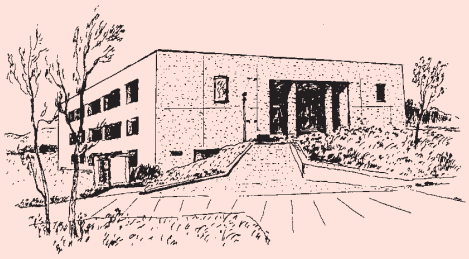
福島大学附属図書館報

書燈

No.42 2009.4.1発行



〒960－1293 福島市金谷川１番地
TEL（024）548－8083
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/
携帯電話版
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm
福島大学附属図書館

図書館・大学・美術館 ～地域と連携し春を呼ぶ～

行政政策学類 辻 みどり

福島県立図書館との間に協定が締結され、1月6日より図書の貸出・返却の新しい連携が始まった。これまでも県内の大学および公立図書館との間に蔵書目録検索や相互貸借制度が整っており、私自身の経験では、卒研のテーマにアニメやポピュラー音楽、映画やメディアが取り上げられるようになって以降、参考文献を探すなら県立図書館を試すよう学生に勧める機会が増えていた。

大学での教育研究の枠が広がってもコアなアカデミズムの領域が消滅するわけではなく、参考文献リストが長大化する一方で予算が緊縮していく昨今、福島という空間で知の棲み分けの壁を取り払う今回の試みは、時宜を得たものだと歓迎している（大学側には相互貸借の費用が無料になるという利点がある）。

さらに、今回の協定による実質的な効果は、地域住民の方々の便宜が図られたことに加え、地域住民の一人ひとりの目に「知の所在」としての大学の存在が可視化したことだと思う。「知の所在」は山を越えた金谷川にあり、市街地から伏拝を越えて大学の建物群が目に見えるわけではないが、大学の蔵書が県立図書館のカウンターから地域の人々の手に渡るたびに、その一冊一冊が蔵書印とともに福島大学という「知の所在」を伝えるメディア（媒体）となって地域の生活に入り込んでいくことになるだろう。

ところで県立図書館の隣には県立美術館が併設され、図書館や大学と同様に「文化資産」であるとともに文化を再生産する「文化装置」として機能している。現在、県立美術館と大学の連携も、草の根的ではあるが着実に進みつつあることをご紹介したい。

行政政策学類の2008年度教養演習（辻担当）では「生活のアート化 / アートの生活化 ～ 地域の文化装置としてのミュージアムと地域の文化政策」というテーマのもとに活動を行ってきた。私自身の研究テーマと、県立美術館の運営協議会委員を務めていることが背景にあって実践に至った企画だが、県立美術館と大学の連携の「はじめの一歩」として、辻ゼミばかりでなく同じ学類の田村ゼミ、同ゼミ卒業生で学芸員資格を持つ石井さん、人間発達文化学類の渡邊ゼミとチームを組んで文化ボランティア（館内での文献整理作業）を行ったり、学芸員を招聘して大学で特別講義をしていただいたりした。その過程で企画展における大学生割引が初めて実現した。

秋口には、辻ゼミ生が企画展「福島の新世代2009」の「ケンビ煎餅プロジェクト」ワークショップへのアシスタント・スタッフとして参加したことから、ポスターやカタログに「協力 福島大学行政政策学類」と記載され、大学と美術館の連携が可視化された。ゼミ生は、上記の活動体験を記録するとともに、ゼミ独自に行った先進美術館のヒアリング調査や、文献講読、情報収集の成果を併せて報告書にまとめ、「如春荘」で公開報告会を行い、県立美術館への《提言》を学芸課長に手渡した（『福島民報』2月21日付朝刊参照）。ゼミ生たちは来年度も自主学習プログラムとして継続する意欲を見せているし、私の方では、学外へも参加者を拡げたいと考えている。興味をお持ちになった方はぜひご連絡をいただければと思う。

未曾有の不況下、すでに文化政策に陰りが見られるが、冬の時代にはそれなりに、既存の地域の「文化資産」を存分に活用する方策を考えるのが現実的だ。図書館・美術館・大学といった地域における「文化装置」が互いに連携して、文化的まちづくりに努め「クリエイティブ・シティ」（創造都市）創生を目指しながら春を呼び寄せたい。

「海外の図書館事情」～オークランド大学　総合図書館～

経済経営学類　中村　勝克

オークランド(Auckland)はニュージランドの北島にある国内最大の都市で、人口の４分の１強がこの都市の周辺に集中しています。ただ「４分の１の人口」と言っても、流石はニュージランド。人数的には約125万人、仙台市の人口規模よりも少し大きい程度です。街にはアメリカズ・カップで有名なオークランド港が在り、そこには大変立派なヨットが、まるで福島駅前の駐輪場の如く、日常的に幾つも停泊している状態です。また、港近くには、本来の意味でのダウンタウンが開けており、程よい喧騒が多くの人々の足を向かわせます。

一方、港の周りには、全面を美しい芝生で覆った丘陵が点在しており、街の真ん中から少し歩くだけでも、萌えるような芝の絨毯にしっとりと腰を下ろすことができるわけです。夏の休日ともなると、時々鳴る少し長めの汽笛を耳にしながら、その上で読書や昼寝をして、自分だけの時間を満喫する人たちをよく見かけます。ただ、大きな丘が点在しているということは街が起伏に富んでいることを意味し、私の住んでいたアパートから、研究室の在るオークランド大学に向かうのも、ちょっとしたハイキング気分でした。

オークランド大学は伝統のある大学で、ニュージランドのトップスクールの一つといえます。大学内の設備は大変充実しており、小高い丘の上のキャンパスには、学部・学科別の図書館が複数在りました。その中でも、多くの学生の利用する中心的な図書館が総合図書館(General Library)で、キャンパスの真ん中、丘の頂上から少し下った場所に、７階の建物がそびえています。もっとも多くの学生が利用するとは言っても、常に多数の学生でごった返しているというわけではなく、試験期間以外なら、誰もが十分に席を確保できる程度でした。おかげで、私も研究室とあわせて、総合図書館をゆったりと利用できた次第です。

なお、図書館内の表示は、全て英語と先住民であるマオリの言葉(マオリ語)が併記されていたことも印象に残っています。マオリ語も英語と同様ニュージランドの公用語のためですが、このような表示がニュージランドらしさを醸し出すと同時に、外から来た人々にマオリの歴史や文化に興味を抱かせるきっかけを与えている気もします。

ちなみに、マオリについてオーストラリアの先住民であるアボリジニーと混同してしまう人も時々いるようです。しかし、そもそもマオリとアボリジニーは、全く異なった歴史的背景を有しています。ニュージランド社会におけるマオリに対する差別は、オーストラリア社会におけるアボリジニーに対するものと本質的に違い、前者の方が相対的に小さいようにも映ります。もちろん程度の問題であり、貧困層の多くにマオリがいることから、社会には見えない壁が内在しているのも事実でしょう。

さて、オークランド大の総合図書館で印象深かったもう一つのことは、出入り口の管理です。しばしば警備員がいましたが、全くＩＤ等をチェックすることなく、みんな勝手に出入りできるようになっていました。まるで十数年前の日本における大学図書館みたいで牧歌的だなと微笑む一方、部外者がトラブルを起こしたりしないのか、多少気になったものです。

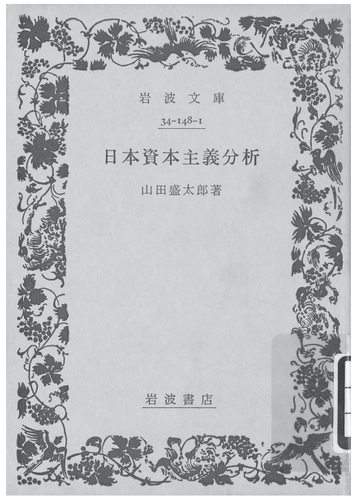
そんなある日、図書館のいつもの席に座っていると、吹き抜けになっている中央階段ホールから、突然、館内に響き渡る男の歌声が聞こえてきたことがあります。その歌は数分続いたのですが、業を煮やした一人の女性が「警備員は一体どこにいるの!!」と怒鳴ったため入り口の警備員が駆けつけ、程なく歌声は止まりました。警備員とのちょっとした言い争いの後、直ぐその男は追い出されましたが、男がマオリだったことに気が付いたのは出て行く彼の姿を見たときです。彼の歌自体は普通のポップスで、彼の行動に深い意味が有ったわけでは無いでしょう。ただそれにも関わらず、あの居心地を悪くする美声は奇妙な感情を私に植えつけ、結果、オークランド大学の総合図書館に関する忘れられない思い出の一つに成りました。

思い出の一冊　『日本資本主義分析』山田　盛太郎 著

(初版1934年、復刊改版1949年、岩波文庫版1977年)

人間発達文化学類　伊藤　宏之

1965年２月の大学２年次、民法の期末試験で「君はリーガル・マインドがない」と言われて答案を返された時、弁護士志望をあきらめた。今思えばよかった。以後、迷いが消えたわけではなかったが、政治に向ったのは確かである。といっても、ストレートに運動に走るとか党派に属するということではなく、文学への関心を継続しつつも、その頃から本当の意味での思想を求めて彷徨が始まったと思う。友人たちと丸山眞男『日本の思想』(1961)や大塚久雄、内田義彦などの著作を読み始めた。議論で行き詰まると、ゼミの先輩院生や助手の部屋に押しかけては、アドバイスをもらった。それらの大家の起点が山田盛太郎だということの意味が少し見え始めたのは、３年次終わりから４年次のこと。



(岩波文庫版)

難しい。何度も放棄した。しかし、その魅力からは離れがたい。院生になって、石田雄『近代日本政治構造の研究』についてのレポート準備中に《少し近づいたな》と思った。その主な論点は、日本近代の「アジア的特質」の基盤を農耕の零細性・分散性に見るということであった。(なお、『分析』の方法を前近代日本社会分析に具体的に生かした作品として、守本順一郎『日本思想史』、未来社、2009年３月復刊がある。)以後、職業として欧米政治理論資料の読み込みを続けたが、市民革命後の重商主義体制論や産業革命論の検討(ロックやスミスなど)で、『分析』との対話は続く。

『分析』は、読むたびごとにその深みの一端を開示する。最大の魅力は、近代日本＝「軍事的半封建的資本主義」の生成・発展・崩壊の全過程を一言の無駄なく描き切り、崩壊後の日本再建の基本線を、特に米国とアジア(中・印の独立＝革命)との関連において明示したことにある、と私は受け止めている。(占領下の1949年版では、この箇所が検閲削除されている。)丸山、大塚、内田らが、理論的あるいは実証的に『分析』の重要なポイントを深化させたことは周知であるし、それらによって私の『分析』理解が進んだのであるから、その学恩には感謝している。しかし、独自に見えるそれらの研究の展開、その他も、大きくは『分析』の枠内にあるのではないか、との感は深まっている。

金融危機が社会全体に及ぶ現代においても、『分析』が示唆するところは少なくない。例えば、1929年に始まる米国発世界恐慌時、米国市場に大きく依存する日本絹業資本の養蚕農家(自作農が中核)への「特約取引」導入が養蚕崩落・農村解体をもたらし、それが農本主義＝ファシズムの温床となって大陸侵略の動員源とされたことなど。さらに、一例を挙げるとすれば、自由民権運動抑圧を伴う明治政府による「富国強兵」政策強行に対する各段階での見直し＝国民的対抗の課題析出がある。「軍事的半封建的日本資本主義」は、明治30年代(1900年代)に確立しながらも、それが国内外の条件に規定されて即帝国主義に転化する。その明治末期の社会主義が第一。第一次世界大戦後不況期の、米騒動・大正デモクラシーが第二。そして世界恐慌時の昭和社会主義が第三。これらの、国民的抵抗運動に対する強圧の実相と内部的敗退要因についても、『分析』は今なお、省みられる価値があると思う。

『分析』は、私にとっては「思い出の一冊」であるばかりでなく、これからも生き続ける一冊である。

「一般利用者の立場から」

福島市在住　西山　泰男

私のような老生にとって最近の学生は非常に便利になったと思うのは、やる気さえあれば何でもでき、羨ましい感じさえする昨今である。レポートもパソコンで検索して適当に組み合わせれば、いとも簡単にしかもお上手にできるであろうが、果たしてそれが学力の向上といえるであろうかと危惧の念を抱かざるを得ないのである。一冊ずつ読み要点を書き写すなどの過程で覚え、その蓄積の中で己の考え方が萌芽していったことが昨日のように思いだされるからでもある。

私のように農学のなかでも経済経営的な問題をもって、県内はもとより最近は静岡を超え四国まで足を伸ばして農家や農協を訪ね「見聞き」して歩く仕事をしているが、その仕事に入る前の事前調査のため、よく貴大学所蔵図書を利用させていただくが、ない場合も時折あり、そのとき「利用者サービス」の方々にお世話になり、他の大学との連携が完璧といっていい程整っていることに驚嘆しているひとりである。昔はとても現在のような閉ざされた象牙の塔でもあったし、以前某大学の農学研究所の教授の紹介状をいただき、図書館の書庫に入り、ようやくにしてその貴重な戦時中の資料が見つかりやっとの思いで論文を書くことができたことがあった。

前述の静岡を超えてというのは、少々わけがある。浜名湖の北東の地に旧三ヶ日町があり、日本最高級の蜜柑産地であり、この地の蜜柑産業を育て上げた人々の絶えまない努力が、柑橘産業に携わっている人々では「三ヶ日みかん」を知らない人はいないといわれる程の銘柄を生む産地である。その産地をつくり育てあげた人々との交流を続けているが、とりわけ中川、清水、山本さん等々からの教えられたことは、有機農法を1954年から始め山林解放による増反も並行して進めた結果一大産地となった。この中川さんのご好意を受けて、香川の旧大野原町を訪ねたときも貴図書館で事前に関係資料を読み終えてから出立した。これが長い慣習になっている。

福島大学附属図書館と福島県立図書館の連携について

利用者サービスチーム

平成21年４月、福島大学附属図書館と福島県立図書館は、相互協力に関する協定を結びます。今後はそれぞれが所蔵する資料を相互の図書館カウンターで、貸出・返却ができることになります。

具体的なサービス内容は、以下のとおりです。

① 県立図書館の本や雑誌を、当館カウンターで貸出・返却することができます。

② 福大図書館の本を、県立図書館カウンターで貸出・返却することもできます。

福島大学附属図書館では約82万冊、雑誌１万３千タイトルを所蔵しています。年間の受入冊数は約１万冊、継続受入している雑誌は、約3,300タイトルです。所蔵内容は人文・社会科学系図書を中心とした専門書が充実しており、共生システム理工学類が設置されてからは、自然科学系図書の収集にも力を入れています。これまでも多くの地域住民の生涯学習活動にご利用いただいていました。

福島県立図書館では約79万冊の蔵書、年間の受入冊数約２万４千冊、継続受入雑誌約1,200タイトルとなっています。所蔵内容は福島県に関する資料として、古文書、古記録から県・市町村史、県人の伝記、歌・句・詩集・同人誌、県や市町村の行政資料等を網羅的に収集しており、特に充実しています。また、一般図書も幅広い収集を行っています。本学の多くの学生も、県立図書館に出向いて利用しています。

両館併せて160万冊を超える資料を利用できることは、本学にとっては、大学と県立図書館との距離が離れているため、授業やサークル活動などで、なかなか時間が取れない学生の自主学習活動、教員の研究に大きなサポートができるものと考えています。また、県立図書館にとっては、働きながら学ぶ方が必要とする専門書を利用できる環境が整うことになります。

相互協力での配送システムは、福島大学から業務連絡のため市内の附属学校園を回る公用車や県立図書館が県内公共図書館へ資料を配送する巡回車を利用して資料を配送することにより、利用者に経費的負担をかけない方式です。

１月から週一回の配送を試行として実施してきましたが、２月まで計８回の配送では貸出・返却資料249冊の利用実績があり、当館利用者の貸出・返却が多数を占めていました。県立図書館との相互協力は、本学にとってかなり有用な図書館連携といえますので、大いに活用していただきたいと思います。

（試行期間の利用実績 １／６～２／17）

福大図書館から県立図書館へ貸出	7冊
県立図書館から福大図書館が借受	24冊
県立図書館での貸出を福大図書館へ返却	208冊
福大図書館からの貸出を県立図書館へ返却	10冊

当面の相互協力は、資料の貸出・返却ですが、利便性を向上させるために巡回車等の回数を増やすことを考えておりますし、資料の貸出･返却以外のサービスへも拡大する予定です。

将来は、福島市内の大学図書館や市立図書館とも協力ができれば、より便利となることでしょう。今後もサービス向上のための取り組みを続けていきたいと思います。

（利用方法については、「別刷　第９号」をご覧ください。）

こんなものがあったのか！（『灰谷健次郎の本 第2巻 太陽の子』理論社）

教育学研究科2年　酒井　裕太

皆さんの中にもこの本をご存知の方がいると思いますが、専門書が多い福島大学附属図書館にもこうした小説・物語が多いことを紹介したくてこの本を挙げました。それともう一つの理由は、中学校以来あまり小説や物語を手にとって読むことのなかった私が何気なくこの本を読み始めたらどんどん引き込まれていったからです。内容は、神戸の下町で琉球料理店を営んでいる夫婦の娘「ふうちゃん」を主人公にした物語です。ある時突然精神を病んでしまった主人公の父やそれを支えるふうちゃんを始めお店にやってくる人達（主に沖縄出身者で神戸に働きに来ている人達）が巻き起こす騒動、その人達一人一人も悲しい過去を背負って生きているのだということを、ふうちゃんの目で描かれている本です。ふうちゃんの両親は沖縄で生まれ育ち、太平洋戦争を体験して戦後神戸に引っ越してきたという設定になっています。詳しくは実際に読んで頂きたいのですが、ふうちゃんの両親にとっての「今の現実」はあまりにも重く、厳しく、悲しいはずであるのにそれでも優しい人達であり続けることや、お店にやってくる人達もまた色々な過去を背負いながらも楽しく優しい人達であることが私にとって何か琴線に触れるものを感じました。このことは次に紹介する一文に端的に述べられています。『ふうちゃんのお母さんは、ある夜、しみじみとふうちゃんに語っていた。「生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人のなかにも死んだ人もいっしょに生きているから、人間はやさしい気持ちを持つことができるのよ、ふうちゃん」』と。この一文を読んだだけでも単に物語の中でのセリフに留まらず、自分に置き換えてみても深く考えさせられた一文となりました。最初に述べたことに戻りますが、この本はたくさんの物語の中の一つであり、なぜこの本を紹介したかったのかというと、私自身にとって「こういう本があったのか！ここまで考えさせられた本はなかった！」という感動があったからです。レポートや試験のためだけでなく、時間がある時はこの本に限らず色々な本を読んでじっくりと自分と向き合ってみるという時間もいいのではないでしょうか？

●●● 学内教員著作寄贈図書 ●●●

『外国人労働者と地域社会の未来』

福島大学ブックレット
『21世紀の市民講座』：1
公人の友社　2008.10
桑原靖夫、香川孝三著：坂本恵編著
請求記号：366.8/Ku95g

東北地方が直面する外国人研修生や外国人労働者をめぐる、給与未払いや人権侵害にかかわる問題は、このところの急激な景気後退の中、深刻さの度合いを増している。さらに、外国人介護士・看護師の導入が本格化している。地域の国際化が急速に進む東北地域で、在住外国人の権利をどう守り、ことばと文化の壁を越えて、どのように豊かな共生の道を築くことができるのか。

本書は、2007年10月に開催された、福島大学行政社会学部20周年記念シンポジウムの記録である。第一章、桑原靖夫（労働経済学・労使関係論）「見える国境・見えない国境 地域活性化と外国人労働者」、第二章、香川孝三（国際労働法・アジア法）「労働力送り出し国としてのベトナム」、第三章、坂本恵（言語文化論）「外国人労働者と地域社会の未来」は、外国人労働者の問題をグローバリズムと規制緩和などの枠組みの中で構造的にとらえなおし、現地送り出し国の状況などについても詳細に検討しながら、問題解決の方途を提示する。

多様な専門家にとって問題解決の糸口を探る必携の一冊である。

『自治体政策研究ノート』

福島大学ブックレット
『21世紀の市民講座』：2
公人の友社　2008.9
今井　照 著
請求記号：318/I43j

この４年間、自治体向け月刊誌『ガバナンス』（ぎょうせい）に「市民の常識 VS 役所のジョウシキ」というコラムを連載している。これは、自治体政策に関する折々の話題を素材に、あと一歩、深く考えるためにはどのような視点が必要か、ということを考えながら書き綴ってきたものだ。本書はその連載を中心に、一部を再構成してまとめたものである。

私が担当している「公共政策論」という講義の構成でいえばイントロにあたるものといえよう。全国の大学で「公共政策論」という科目がおかれ、「政策」という名を冠した学部も増えてきた。ある研究論文によれば、その第1号と目されているのが、福島大学行政社会学部である。公共政策学会という学会も、誕生してから十余年がたち、会員数も約千人となった。何冊かのテキストも刊行されている。しかし、公共政策「学」という学問が体系的に整序されてきたといえるわけではない。むしろ、公共政策論にとっての生命線は、現実との切り結びをどのようにはかるのかというところにある。距離を置きすぎるのは問題だが、近すぎるのも社会科学としてどうかという批判を受ける。この本についていえば、雑誌連載という性格や読者層を想定して、かなり現実問題に接近しているが、その分だけ、読みやすくなっていると思うので、ご一読いただけたらありがたい。

『住民による「まちづくり」の作法』

福島大学ブックレット
『21世紀の市民講座』：3
公人の友社　2008.9
今西　一男 著
請求記号：093.18/I45j

この本は福島市蓬莱団地で著者が主体的に参加・支援している「福島南地区を考える会」の活動から、日常の立ち居振る舞いとしての「まちづくり」の作法を考え、提起することを目的としています。昨今、「まちづくり」にとりくむ住民の動きは各地にありますが、その初歩から試行錯誤が続く場合が少なくありません。そこで、日々の営みとしての「まちづくり」にとりくもうとする住民のために、その基本書を編んだものです。

蓬莱団地は1970年代に一斉に入居が進んだニュータウンです。しかし現在、また一斉に少子化・高齢化による衰退の道をたどっています。考える会ではその流れをふまえ、住民自身が行う生活環境の改善を考えています。この本ではまち歩き、社会調査、ワークショップ、イベント、提言といったその活動の記録から、地域の問題を自ら考えようとする住民による「まちづくり」についての手がかりを示しています。ニュータウンの再生という都市計画のテーマに関する文献としても、多くの方に目をとおしていただきたいと思います。

●●● 学内教員著作寄贈図書 ●●●

『ネーションと市民』

岩波講座憲法：3
岩波書店　2007.6
中里見　博 ほか
請求記号：323/Su46n

憲法施行60周年（2007年）を機に、岩波書店が憲法を「原理的に追究する」ことを目標に「岩波講座 憲法」（全6巻）を刊行した。本書はその第３巻であり、私は「フェミニズムと憲法」を寄稿している。『現代法』1965~66年（全15巻）、『基本法学』1983~84年（全８巻）に続き、本講座は20年ぶりの法律学独自の岩波講座であった。本講座の特徴は、「原理的追究」のほかに学際性にある。編集委員６名のうち２名が法哲学者と政治学者であり、「憲法学を専門としない者にも興味深く読めるように」という方針が特に執筆者には求められた。本書に限れば執筆者10人の過半６名が政治学者などによる。多文化主義やマイノリティの権利主張に直面して、「ネーション（国民）」や「ステート（国家）」を前提にしてきた憲法論が修正を迫られているという問題意識のもと、「国民主権とナショナル・アイデンティティ」「共和主義と公共性」「多分化主義とマイノリティの権利」「『自治』を問い直す」という４部構成で、新たな憲法論をめざした書物となっている。

『あすの地域論：「自治と人権の地域づくり」のために』

八朔社　2008.10
清水修二、小山良太、下平尾勲編
請求記号：361.7/Sh49a

「あすの地域論」は、長年、地域研究を行ってきた本学教員が学類を超えて結集し、「地域」を学ぶ初学者向けに作成した教科書である。現在、「地域」が抱える問題を総合的に把握するとともに、地域自立の道を探るため政策、振興主体のあり方を具体的な事例を交えて解説している。多く地域では、従来のような中央主導・外部依存の地域経営を脱却して、地域住民・地域産業との連携のもとに地域政策を自主・自立的に提案し、地域活性化に取り組んでいく必要がある。

地域の主体的対応による地域づくり、地域の自立的運営は可能なのか。本書では、まず第Ⅰ部において、地域政策の歴史とグローバル化が進む現段階的到達点を明らかにした上で、農業・農村問題、商業・市街地問題、工業と立地問題という地域・産業別の分析を行っている。第Ⅱ部では地域づくりの方法と担い手に関して、循環型社会論、内発的発展論、地域金融論、地域文化論、地方自治論、NPO 論など最新の理論研究を交え、先駆的な取り組みを検証することで地域自立化の道を提案している。

『社会保障：社会保障制度 社会保障サービス』

社会福祉士シリーズ：12
弘文堂　2008.11
福祉臨床シリーズ編集委員会編
熊沢 透 ほか
請求記号：364/A12s

資格試験対策と実務上の手引きとなる教科書・実務書です。アカデミックな仕事ではありませんが、ある程度の自負をもって脱稿しました。みなさんの今後の生活により一層深く関わることになる社会保障制度の基礎知識を得るために、手にとってみてください。また、私の担当科目「社会政策」「労働経済」（2009年度は「経済政策」も）の参考図書として適宜参照してもらえれば、より詳しく理解できるはずです。

2006年に同じ執筆陣で上梓した『臨床に必要な社会保障』を、その後の社会情勢や制度改定をふまえつつ、データを更新して改訂したものです。私の担当した労働保険分野でも、保険給付の統廃合や料率の変更があり、今回の改訂作業は少々煩瑣ではありました。

しかし、幸か不幸か今にいたって悩ましいことがあります。昨今の雇用情勢の悪化を受けて、雇用保険の適用範囲や給付条件の変更が検討され始めました。概して望ましい方向での制度変更ではありますが、近々また「改訂作業」が必要になりそうです。この種の本の宿命ですね。

カウンターの内側から

教育学研究科2年　森　大和

『書を捨てよ、町に出よう』、これはある本のタイトルであるが、同時に若者の身体に響く掛け声でもあった。この掛け声に誘われてか、自身の身体のうずきを解放するためか、若者は町にたむろした。そんな時代もあった。ところで、今の若者はどこへいったのだろうか。どこと繋がっているのか。田舎か町か海外か、喫茶店か小戯れたJAZZBARか。著者は、もちそんな場に居心地の良さを見い出せない。彼らは、自分を広大で混沌とした情報の海と、インターネットの世界と接続させて生きている。

グーグルは、本の完全電子化を目指している。いつこの事業が達成されるかはわからない。が、急激なペースで行われている。最近は、携帯で小説が読めるようになった。多くの読者を確実に獲得している。

図書館にある本は、物体である。故に、古くなり、ぼろぼろになってしまうこともある。かびが生えることもある。書庫の奥底から引っ張り出してきた本は、利用者の方に埃っぽくてとてもじゃないが読めない、と言われることもある。

こんな不便なものを、大切に貯蔵している図書館とは、何と不思議なところなのだろうか。世界中の全ての本が電子化されれば、図書館は、古い本を保管するためだけの施設になってしまうのかもしれない。そのとき、図書館を訪れる人はほんの僅かな人たちを除き、いなくなってしまうかもしれない。そのとき、カウンターの内側にちょこんと座っている人もいなくなり、機械が本の貸出返却処理を行ってくれるのかもしれない。

けど、まだそのときではないようだ。図書館を利用してくださる人たちはたくさんいる。本がぼろくて読みづらいぞとか、言いながら、それでもまだ、図書館を利用してくださる人たちはこんなにたくさんいる。私もカウンターの内側にちょこんと座っているだけでなく、請求された本を探しに行ったり忙しく仕事をしている。若者は、書を捨ててもいないし、図書館にも来てくれる。うれしい話だと、思うのである。

目　　次

- 巻頭言「図書館・大学・美術館～地域と連携し春を呼ぶ～」……辻　みどり(1)
- 「海外の図書館事情」～オークランド大学 総合図書館～……中村　勝克(2)
- 思い出の一冊：『日本資本主義分析』……伊藤　宏之(3)
- 「一般利用者の立場から」……西山　泰男(4)
- 福島大学附属図書館と福島県立図書館の連携について……利用者サービスチーム(4)
- こんなものがあったのか！……酒井　裕太(5)
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
  - 『外国人労働者と地域社会の未来』……坂本　恵(6)
  - 『自治体政策研究ノート』……今井　照(6)
  - 『住民による「まちづくり」の作法』……今西　一男(6)
  - 『ネーションと市民』……中里見　博(7)
  - 『あすの地域論：「自治と人権の地域づくり」のために』……小山　良太(7)
  - 『社会保障：社会保障制度　社会保障サービス』……熊沢　透(7)
- カウンターの内側から……森　大和(8)